



チェスの神様
VS 世界



大泉 章

チェスの神様 VS 世界

世界中がひとつになっていた。ひとつになって戦いを挑んでいた。倒す相手はただ一人、ボビー・カスパチョフだ。

カスパチョフはチェスの世界チャンピオンだ。それもただの世界チャンピオンではない。長い歴史の中で現れた数々の天才をも凌ぐ、史上最強のチャンピオンだ。

このチェスの神様と世界が戦うインターネットイベントには世界中から膨大な数のチェスプレイヤーが参加し世界チームを創り上げていた。それは元世界チャンピオンから始めたばかりの初心者までが集まる巨大な集団だった。

イベントには数多くのスポンサーがつき、賞金は数百万ドルに膨れ上がった。ブックメーカーもつきオッズは八対二でカスパチョフ有利と出ていたが、それでも参加者の多くは勝つことができると信じていた。

試合は持ち時間が各三時間、その後は一手六十秒の秒読みで行われ、カスパチョフが一人で考えるのに対し、世界チームは一手ごとに投票を行い、最も票の集まった手を次の一手とすることにした。

アメリカの東部標準時の正午、ニューヨークにいるカスパチョフの第一手が世界中のパソコン画面に映し出され、試合は始まった。

試合が進む中、世界チームでは一手ごとにいろいろな意見が出され、議論が行われていた。そして議論を参考に各プレイヤーが自分の考えを決めると、全体で投票を行い次の一手を決定した。それが終わるとしばらく静かになり、カスパチョフの次の一手を待つ。カスパチョフの次の手が示されると、また議論でにぎやかになる。その繰り返しだった。

敬一が世界チームに加わったのは日本時間の朝五時半。試合が始まってしばらくしてからのことだった。

敬一は三十二歳。三歳年下の妻と先月一歳になったばかりの息子と三人で暮らす、フリーランスのグラフィックデザイナーだ。

仕事に追われる日々を過ごす中、このイベントを楽しみにしていた。

敬一は世界チームの中において、新鮮な気持ちになっていた。

そこには不思議な世界が広がっている。突然世界中のチェスプレイヤーが集まってできた新しい世界だ。そしてその中の人々はお互いのことを全く知らない。それはまるで創られたばかりの世界のようだ。

創られたばかりといっても、アダムとイヴの世界とは違っている。

そこには最初から人が大勢いる。そして人は赤ちゃんのように生まれることはない。どこからともなく突然現れる。そしていなくなる時は、何の前触れもなく突然消える。その繰り返しだ

。常に一方では何千もの新しい人が加わり、他方では去っていく。
敬一はこのような人の移り変わりの中に自由と可能性を感じていた。

試合は序盤。

カスパチヨフ有利に進んでいる。

世界チームでは神様を倒すために、一手ごとに熱心な議論を戦わせていた。

敬一も積極的に自身の考えを発表した。

「そこはポーンを突くべきだ」

「いや、それではビショップが働かなくなってしまう。そこはナイトを上げるべきだ」

敬一は持論を展開しているうちに、周りには似通った実力のプレイヤーが集まってきて、小さな議論のグループができていた。

その中で、敬一は多くのプレイヤーの支持を集め始めていた。

人から支持されるというのはなんとも気持ちのよいものだ。

敬一は一手ごとに次々と自分の考えを発表した。そしていくつもの議論を続けているうちに敬一を支持するプレイヤーの数は数百人へと膨れ上がっていた。

敬一はうれしかった。自分がリーダーにでもなったかのような気分がした。

しかし気は抜けない。一度でも間違った意見を言ってしまうえば命取りだ。それは敬一に議論で敗れていったプレイヤーを見れば明らかだった。

そこに集まっている人々は残酷で、また時として悪意に満ちている。機会さえあれば揚げ足を取ってやろうと狙っているのだ。そして一度失脚したものは二度と立ち直ることは許されない。

敬一は慎重に、議論を続けた。そして支持者の数をさらに増やしていった。

試合は中盤を迎えていた。

やはりカスパチヨフ有利に進んでいる。

敬一はもちろんこの世界にだけ存在しているわけではない。神様のいる世界にも存在している。ただ、そこでの敬一は平凡なグラフィックデザイナーでしかない。その世界には長い歴史があり、力のない者は遠い昔に淘汰されてしまっている。そこには無数のリーダーが存在し、王様のように力を持つ者がいて、更にはカスパチヨフのような神々が存在している。

敬一は夢中で議論を続けた。そして支持者の数はさらに増えていった。

ここには長い歴史はない。ルールを覚えたての初心者が、元世界チャンピオンの意見に反対票を入れることなど当たり前のように行われている。

敬一はこの自由な空間で、闘争心をむき出しにして議論を戦わせ、さらに支持者を増やしていった。敬一は体の中で何かが大きく膨らんでいくのを感じていた。

試合は中盤を過ぎ、終盤へとさしかかっていた。

そしてカスパチヨフの優位は決定的なものになっていた。

敬一は、周りから膨大な支持を得るようにはなっていたが、それはあくまで中級者の間でのことだ。

敬一は思い切って上級者のグループへ参加してみた。そして自分の意見を発表し、議論を戦わせてみることにした。

上級者の集まりでは、次の一手については、もうそれほど真剣に話し合われてはいなかった。その代わりにカスパチヨフの強さと戦前の見込みの甘さが話題の中心となっていた。

そのような中で、敬一の意見はあまり相手にされていないようだった。

敬一はもう一度自分の考えを、今度はもっとはっきりと目立つように発表してみた。

すると、その場は一瞬静かになった。それはお互いが譲り合っているかのような、ちょっと気まぐず一瞬だった。そして、誰ともなく一人が敬一の意見に対して簡単なコメントを発した。

敬一の意見は一瞬にして、しかもあっけないほど鮮やかに否定されてしまった。

そこに集まっているプレイヤーは敬一とはレベルが違っていたのだ。

敬一は愕然とした。

自分の力は所詮こんなものなのか……。

その様子を見ていた敬一の支持者は、とたんに態度を変え、敬一をあざ笑った。そして次々と敬一のもとを去っていった。

今まで一人で必死に戦い築き上げてきたものは、一瞬にして失われてしまったのだ。

敬一はそのまましばらくパソコンの画面を見つめていたが、そこでの敬一にはもう何も残されてはいなかった。

敬一の体の中で膨らんでいたものがスーッとしぼんでいき、そしてただ沈黙の時間が過ぎていった。

「あなた。税務署に行く時間よ」

妻の声がした。

東京はすがすがしい春の朝を迎えていた。

パソコンの前に座っている敬一は、電源を切ると、握りしめていたコーヒーカップをテーブルに叩きつけ、大きな声で一言「死！」と叫んだ。

それを聞いた妻は、明るい声で言った。

「死と税金は逃れられないのよ！」

ベンジャミン・フランクリンの有名な言葉だ。

敬一が振り向くと、そこには妻がにっこりと笑顔で立っていた。それを見たよちよち歩きの息子もうれしそうに笑い、そしてバタバタと敬一の方へとかけ寄ってきた。その小さな手には歯形だらけのチェスの駒がしっかりと握られている。

「さあ。出かけよう！」

敬一は立ち上がった。

三人は支度をすませガレージにある小さな車に乗り込んだ。そして、柔らかな春の日差しの中を税務署へと向かっていった。